

逃げ

第 14 期生 吉永 瑞季

このエッセイを書くにあたって、私は今「やばい、ガチめに何も書けない。」と思っている。異常事態である。同期や一部の先輩はご存知かと思うが、私はかなりの長文魔で、ゼミ HP の活動記録にしても、SNS の更新にしても、ほぼ 100% が読者を疲弊させるほどの長文を書く女なのである。それなのに、何も書けないと思うのは、せっかく思いを綴る場を用意していただいているのに、何も書けないと嘆くのは、紛れもなく、思い出と、それに対する想いが重すぎるせいである。という前置きにしても、まとめなければならぬものはまとめなければならない。感謝、充実感、反省…と、書きたいことはたくさんあるのだが、全部書くと内容が薄くなってしまうので、1 つどうしても言いたいことだけを書く。書きたかった感謝と充実感と反省は、また別の場でお話し出来ればと思う。

それは、「逃げ」という選択肢を大事にしようということである。私は、三田論執筆中に、「どうしても今日はやりたくない。もう何もかもが嫌だ。メンバーに迷惑をかけることになったとしても、今はやりたくない。」と思った日があった。そして私は家に籠るという方法で、論文から、そしてメンバーから「逃げ」た。その結果、比較的すぐに論文執筆に復帰することができた。「逃げ」という選択肢をとったことで、1 人で心を落ち着けたり、同期の気遣いや支えを感じたりすることができたのである。だから、声を大にして言いたい。「逃げてもいいんだよ。」と。誰しも、心が病むことがあると思う。また、厄介なことに、そんな時ほど、「他人に迷惑をかけてはならない。もっと自分が強くならなきゃ。」という思いが強くないだろうか。首肯できるのならば、心が病んでいないときに、「もし私が病んでそうだったら、〇〇してあげませんか。」と、信頼のおける恋人や家族や友人に伝えておくといいと思う。デートに誘ってね、でも、大好物のシチューを作ってね、でも、とにかく自分が少しでも幸せだと思えることを、他人から与えてもらう道を、病んでいない今のうちに作っておくといいと思う。だって病んだときは「助けて。」って言えないのだから。辛くなったときはいいから一旦逃げなよ！ 誰か助けてくれる！ もし、自分が逃げたときに、仲間が助けてくれなかったのだとしたら、そんなのは仲間じゃない。私は、頭がお花畑なこともあって、こんなことを言うと変かもしれないけれど、私にかかわった人間はすべて仲間だと思っている。家族・友人・同期はもちろん、先生も先輩も後輩も、OB・OG の方々も、みんな仲間だと大真面目に思っている。だから、いつか「助けてほしいけど誰にも頼れない！」と思ったときは、「そういや吉永ってやつが逃げていって言ってたな～」と思い出してほしい。連絡、待っております（無い方が喜ばしいことは確かではありますが）。仲間のためなら何でもします。どうか皆さん、「逃げ」の選択肢を捨てないでください。何よりも大事なものは、自分自身の生であり、心と体の健康なのだから。